

## 前期：キリスト教と政治思想

オリエンテーション

### 1. イデオロギーとユートピア

- 1-1：リクール1
- 1-2：マルクスとマルクス主義
- 1-3：黙示的終末論の系譜
- 1-4：ティリッヒ1
- 1-5：ティリッヒ2
- 1-6：リクール2
- 1-7：知恵思想の視点から
- 1-8：パウロとローマ帝国

### 2. キリスト教と社会主義

- 2-1：宗教社会主義—ティリッヒ— 7/10
- 2-2：宗教社会主義から解放の神学へ 7/17

## Exkurs

- キリスト教と仏教1
- キリスト教と仏教2

## <前回>知恵思想

### (1) 古代イスラエルと知恵の伝統

- 1. 旧約聖書の「知恵文学」：ヨブ記、詩篇の一部、箴言、コヘレトの言葉  
外典の知恵の書、シラ書（集会の書）
- 3. 知恵文学の成立の場：フォン・ラートらの旧約聖書研究→宮廷知識人、とくにエジプトの書記学校に相当する官吏養成 学校の知識人
  - (1) 共同体の知恵（伝承）
  - (2) 対外的な国際関係が要求する国際的な知恵
- 4. 共同体の知恵：共同体の一員として習得すべき知恵（＝慣習的知恵）  
因果応報原理の中心的な役割。  
箴言1章8節「わが子よ、父の諭しに聞き従え。母の教えをおろそかにするな。」

### (2) 新しいイエス像の探求→知恵の教師イエス

- 1. キリスト教思想のパラダイム（20世紀の聖書学の合意事項）：黙示的終末論の宗教者イエス  
1980年代以降の急速な変化：
  - ・聖書学の学際化（神学部から人文諸学部へ）と古い合意事項（「史的イエスにおける確実な歴史的核としての終末論」）の相対化
- 3. 聖書テキストの統一的理解に向けた動向
  - 1) 聖書神学の再構築（旧約聖書神学と新約聖書神学の統合）  
Peter Stuhlmacher, "The Theme: The Gospel and the Gospels," in: Peter Stuhlmacher (ed.), *The Gospel and the Gospels*, William B. Eerdmans Publishinf, 1991, pp.6-7.
  - 2) 知恵思想の系譜：知恵のモチーフにおける旧約聖書と後期ユダヤ教の知恵思想から知恵の教師イエス、そしてさらにキリスト論（神的知恵としてのキリスト、ロゴス・キリスト論）へ至る知恵の伝統（知者の役割）の存在。Ben Witherington III
- 6. 「神の国」という語句は神とイスラエルあるいは人類との関わりを語る物語全体を

呼び起こすのである」(ボーグ、114)、「緊迫感は他の仕方と同様にうまく説明できる。知恵の教師の緊迫感である。……イエスが非終末論的であるという言うのは、イエス伝承にある危機の要素を否定することではない。むしろ、それはその危機の異なった解釈へと導くのである」(177)。

#### 7. 転換的知恵運動としてのイエス運動

人間を疎外する諸対立(ユダヤ人—異邦人、義人—罪人、男—女、金持ち—貧乏人など)を超えた新しい人間関係を創出するものであり、それは食卓を共にする分かち合いの共同体を生み出した(クロッサン)。既存の秩序を相対化し流動化させるヴィジョンを伴った知恵(→十字架という終局)。

#### (3) 知恵思想と「イデオロギーとユートピア」

#### 8. 知恵思想の二類型(クロッサン)

1) 慣習的知恵(conventional)：既存の社会秩序の中で「うまく生きる」「よく生きる」「正しく振る舞う」ことを教える。多くの共同体や社会において普通に見られる(旧約における箴言)。

社会的自己同一性は、様々な対立や矛盾を内包しつつも確固とした実在性をもって人々に実感できる既存の社会秩序を前提とする。社会秩序は重力の法則と同様に、疑いようもない不動の現実として経験される。

伝統的な諸宗教(「教会」型)の大切な役割の一つは、こうした既存の秩序に超越的な正当性を付与することに他ならない。→ 知識社会学(バーガー、ルックマン)

2) 転換的知恵(subversive)：慣習的知恵の虚偽性を暴露しつつ、新たなより人間的な生き方を可能にする別の知恵を教える。既存の社会秩序は決して不動の実在ではない。「神の国」は「この世」の秩序を揺り動かしつつ(=裁きつつ)現実世界へと到来しつつある。

12. 矛盾に満ちた大家族という過酷な現実の中で、子供にも、あるいは子供にこそ、生きる権利があることに気づかせる知恵=現実を別様に見ることを教える知恵。

この知恵は既存の社会秩序を相対化し新しい人間関係のヴィジョンを与える。「知恵の教師イエス」という場合の知恵とは、まさにこの種の知恵に他ならない。

13. 「慣習的知恵→イデオロギー、転換的知恵→ユートピア」という対応関係は、さしあたり成立すると言える。

14. 問題は、イデオロギーとユートピアが本来弁証法的に統合されていたように、二つの知恵は単なる区別されるに止まらないことである。

15. イエスの宗教運動の「神の国」は、「新しい存在」(New Being)の現実化である(テイリッヒ)。決して古くならない、常に新しくあり続けるヴィジョン。

永遠に到来しつつある現実性。→ 黙示的終末論運動は繰り返し回帰する。

#### <知恵の伝統とパウロ>

The New Testament writers (particularly Paul) were influenced primarily by the three later branches of the Jewish wisdom movement: apocalypticism, Jewish missionary theology, and Gnosticism. (Georgi, 7)

## 1 — 8 : パウロとローマ帝国

### (1) パウロ・ルネッサンス

1. 西洋的キリスト教会の神学的基盤としてのパウロ

パウロへの反発・パウロ批判

体制的イデオロギーの代表

## 2. 新しいパウロ解釈：1980年代以降

体制派パウロから戦うパウロへ

政治哲学におけるパウロへの注目

「パウロの神学の社会革命をひき起こす潜在力を秘めていた」「ユダヤ人と異邦人の一体化」（サンダース、24）

「レーニン主義者パウロ」「アウトカーストの共同体」「無制約的な普遍主義への関係にもとづいて形成された戦う共同体」（ジジエク『操り人形と小人』青土社、195）

「そこではもはや、ユダヤ人もギリシア人もなく、奴隷も自由な身分の者もなく、男も女もありません。あなたがたは皆、キリスト・イエスにおいて一つだからです。」（ガラテヤ3:28）

### （2）パウロ——迫害者から使徒へ

#### 1. パウロの思想的背景：ヘレニズム・ユダヤ教と都市

様々な思想的な文脈が交差している。ギリシア語訳聖書の存在。

30頃:エルサレム教会の成立 66:ローマの大火事、皇帝ネロのキリスト教迫害  
66-70:第一次ユダヤ戦争（132-135:第二次）

#### 2. 迫害者から異邦人への使徒への回心（復活のキリストとの出会い）

↓

地中海世界の伝道旅行、都市から都市へ伝道するキリスト教徒と存在  
急速な拡大（点から点へ）

#### 3. エルサレム教会・ユダヤ的キリスト教（ユダヤ教イエス派）

とヘレニズム的キリスト教

律法遵守は救済の条件か、救われるためにはユダヤ人になる必要があるか

### （3）パウロのキリスト教思想の特徴

#### 4. 核心点

- ・キリストの十字架と復活における神の救済の活動
- ・神の救済活動の一環としての異邦人伝道→自らの異邦人伝道の意義

#### 5. 諸論争の文脈に即した議論の展開

いくつかの基本的な原則の存在、しかし首尾一貫した体系化はなされていない。  
いっさいは神の摂理によるが、人間には責任がある。

#### 6. 新しい歴史理解＝救済史（旧約と新約の統合）

異邦人の救い→ユダヤ人の救い→被造物全体の救い

#### 7. 救済とは何か

- ・イエスの十字架（死）と復活への参与 → キリスト共に死にそして生きる  
神秘主義的あるいは密儀宗教的、法律の意味はむしろ二次的
- ・罪の力からの解放：古い存在から新しい存在への変容・移行  
移行は信仰においてすでに始まりつつあるが、終末（再臨）における完成する。

#### 8. 救済に参加した人間は何をするか。

- ・自然な帰結としての倫理的な生活  
律法的生は前提ではなく、結果。模範的な市民であり得る。
- ・キリストの体の一体性（教会）への参与

9. いわゆる信仰義認論：「義の認められる」に止まらず、「義となる」。 cf. ルター

#### (4) パウロと政治哲学

Protestant interpreters have traditionally understood Paul in opposition to Judaism. Luther...

This approach to Paul that has dominated NT studies for generations is based on the unquestioned and distinctively modern Western assumptions that Paul is concerned with religion and that religion is not only separate from political-economic life, but also primarily a matter of individual faith. (Horsley, 1)

in the aftermath of the Holocaust

the great hero of faith who articulated foundational Christian Theology was discovered to share the same fundamental "covenantal nomism" of Judaism,

Paul's new religion of personal faith was no longer seen as sharply opposed to Judaism. (2)

#### 10. 普遍宗教・世界宗教キリスト教への道

民族性を越えて世界へ、市民社会のキリスト教への道???

#### 11. ローマ帝国のイデオロギー

Focus on the Roman imperial order as the context of Paul's mission, however, is leading to another recognition. Instead of being opposed to Judaism, Paul's gospel of Christ was opposed to the Roman Empire.

That Paul's gospel opposed the Roman imperial order, not Judaism, becomes increasingly evident the more we reexamine principal facets and key terms of his gospel, as evident in virtually all his letters. In 1 Thessalonians, from beginning to end, God's kingdom and the true Lord, Jesus Christ, are opposed to the Roman Empire and its ideology of "peace and security," which stand under the imminent destruction of God's judgement (1:10; 2:12; 3:13; 4:14-18; 5:1-11, 23). In 1 Corinthians, from Paul's first long argument to his ecstatic "explanation" of the resurrection, Paul opposes his gospel to the Roman rulers and the imperial order.

2:6-8, 1:26-27; 4:8-10, 6:1-4; 7:31, 15:24, 2:9, 3:19-21 (3-4)

Moreover, just as Paul's gospel of Christ as Lord evidently stood opposed to the Roman imperial order, so the local representatives of that imperial order evidently opposed Paul and his assemblies. (4)

Recent constructions of "the social world of the apostle Paul" have perpetuated the standard view that the *pax Romana* provided a benign context for the Pauline mission and rise of "Christianity." (6)

Political stability may have prevailed in the cities where Paul carried out his own distinctive mission, but that stability imposed by the Roman imperial order surely meant insecurity for many if not most urban people. (9)

#### 12. パウロとユートピア

被造物全体の救済、ローマ帝国の環境破壊のイデオロギーに抗して

Robert Jewett, *The Corruption and Redemption of Creation. Reading Rom 8:18-23 within the Imperial Context.* (25-46)

Jacob Taubes Paul's "political theology" as "a political polemic against the Caesars," (25)

<バーバラ・ロッシング(Barbara R. Rossing)>

「新しいエルサレムにおける生命の川：地上の未来に対する環境論的ヴィジョン」

(Dieter T. Hessel and Rosemary Radford Ruether(eds.), *Christianity and Ecology*, Harvard University Press, 2000.)

13. 黙示録が提示する、バビロンとエルサレムという対照的な二つの都市のヴィジョン、二つの対照的な政治経済学のヴィジョン。

小アジアの「都市のキリスト教徒」(urban Christian)宛という文脈がこの議論に関連している。また、ロッシングは、Dieter Georgiの研究に依拠している。

14. イデオロギー

ローマ帝国の「現実化した終末論」(永遠のローマ、ローマの平和)。

ローマ帝国のグローバルな全能性は地中海の海洋交易が支えていた。黙示録は、このローマの全能と永遠性を転倒している。

・都市の女性的形姿(人格化)による描写。「その主要な論争は、政治的で経済的であり、性差に関わるものではない。」(209)

・バビロンの政治経済学、バビロンの環境破壊。

「バビロンの売春の対する黙示録の批判は、性的ではなく、ローマの搾取的な貿易と経済支配に対して隠喩的に向けられている。」(209)

「奴隷制と奴隷交易に対するもっとも明確な批判」

・森林伐採、「裸の荒地」(17:16)

エレモオー、ギムネー

68-70年のユダヤ戦争についてのヨセフスの証言。

ローマは征服された土地を森林伐採した。グローバルな森林伐採。

帝国主義と不正義への批判。

・バビロンに対する新しいエルサレム、「もはや海はない」(21:1)

「黙示録は海を政治的に描いている」、「悪の場所」「交易船が航海する場所」、

「もはや海はない」=「ローマの貨物船と交易の終わり」

15. ユートピア：別の経済的ヴィジョン

・新しいエルサレム：生命の都、新しいエルサレムは環境論的。

「テキストがわれわれに呼び起こすのは、都市的で環境的な危機、グローバルな市場経済の危機のただ中における神への信頼である。」(214)

・地上における神の家、都市生活のヴィジョン

地上からの脱出(携挙)ではなく、新しいエルサレムは「降りてくる」。

都市的ミニストリの新しいヴィジョン

・贈与的経済(a gift economy)

生命の水をすべての人に値なく飲ませる。われわれがエコシステムに対してダメージを与えることへの預言者的な批判

・エゼキエルの新しい神殿のヴィジョンの拡張。

都には神殿がない(21:22)。神の現臨は神殿に限定されない。全被造物に広がる。

新しいエルサレムは人々を歓待する快適な都市

・諸民族の癒やし。創世記3:22の禁止命令を克服する生命の木のヴィジョン。

都市と田舎の和解。

・新しいエルサレムは未来のためのヴィジョンである。

「わたしたちは、よりよい近隣、聖なる都を描きながら希望を持ち続けねばならない。」

(219)

### <聖書テキスト>

・「異邦人のためにキリスト・イエスに仕える者となり、神の福音のために祭司の役を務めているからです。」(ローマ 15:16)

・「16 わたしは福音を恥としない。福音は、ユダヤ人をはじめ、ギリシア人にも、信じる者すべてに救いをもたらす神の力だからです。17 福音には、神の義が啓示されていますが、それは、初めから終わりまで信仰を通して実現されるのです。「正しい者は信仰によって生きる」と書いてあるとおりです。18 不義によって真理の働きを妨げる人間のあらゆる不信心と不義に対して、神は天から怒りを現されます。19 なぜなら、神について知りうる事柄は、彼らにも明らかだからです。神がそれを示されたのです。」(ローマ 1)

・「6 わたしたちの古い自分がキリストと共に十字架につけられたのは、罪に支配された体が滅ぼされ、もはや罪の奴隷にならないためであると知っています。7 死んだ者は、罪から解放されています。8 わたしたちは、キリストと共に死んだのなら、キリストと共に生きることにもなると信じます。9 そして、死者の中から復活させられたキリストはもはや死ぬことがない、と知っています。死は、もはやキリストを支配しません。10 キリストが死なれたのは、ただ一度罪に対して死なれたのであり、生きておられるのは、神に対して生きておられるのです。11 このように、あなたがたも自分は罪に対して死んでいるが、キリスト・イエスに結ばれて、神に対して生きているのだと考えなさい。」(ローマ 6)

・「だから、わたしたちは落胆しません。たとえわたしたちの「外なる人」は衰えていくとしても、わたしたちの「内なる人」は日々新たにされていきます。」(2コリント 4:16)

・「だから、キリストと結ばれる人はだれでも、新しく創造された者なのです。古いものは過ぎ去り、新しいものが生じた。」(2コリント 5:17)

### <参考文献>

1. H. C. キー『初期キリスト教の社会学』ヨルダン社。
2. 佐竹明『使徒パウロ—伝道にかけた生涯(新版)』NHKブックス。
3. G. ボルンカム『パウロ—その生涯と使信』新教出版社。
4. E. ケーゼマン『パウロ神学の核心』ヨルダン社。
5. 荒井献編『パウロをどうとらえるか』新教出版社。
6. E. P. サンダース『パウロ』教文館。
7. 清水哲郎『パウロの言語哲学』岩波書店。
8. ヤーコブ・タウベス『パウロの政治哲学』岩波書店。
9. アラン・バディユ『聖パウロ—普遍主義の基礎』河出書房新社。
10. ジョルジョ・アガンベン『残りの時—パウロ講義』岩波書店。
11. 宮田光雄『国家と宗教』岩波書店。
12. Richard A. Horsley (ed.), *Paul and the Roman Imperial Order*, Trinity Press International, 2004.
13. David G. Horrell, *An Introduction to the Study of Paul* (Second Edition), T & T Clark, 2006.
14. Dieter Georgi, *Theocracy in Paul's Praxis and Theology*, Fortress Press, 2009.